飛鳥寺西方遺跡

2013年2月
明日香村教育委員会
飛鳥寺西方遺跡

1.はじめに

今回の調査は、飛鳥寺西方に広がる遺跡の性格や規模を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。調査地は、「入鹿の首塚」のすぐ西側、飛鳥寺西門跡から西に約40mの位置にあたります。調査面積は約370㎡です。

この飛鳥寺西方地域は、「日本書紀」において「飛鳥寺西側」としてたびたび登場します。斎明天皇の時代には、飛鳥寺西に須弥山の像を置いたと記されます。その後、壬申の乱の時には飛鳥寺西の楠の樹の下で飛鳥を守るための軍営が置かれたとあります。天武・持統天皇の時代になると、嵯峨や隼人、都賀富人といった当時の飛鳥からみて東京の人々は飛鳥寺西側の下に大勢招いて寝屋を頻々催した場所として描かれており、そこで仏像を授けるなどの仏像儀礼が行われたようです。これらの記事から、飛鳥寺の西には樹の根があり、大勢の人々が集まることのできる「樫樹の広場」があったと考えられています。飛鳥寺西にひろがる飛鳥寺西方遺跡は、「樫樹の広場」の検出地のひとつであると考えられています。

飛鳥寺西方遺跡では、これまでの発掘調査で、土器や瓦が出土し、屋根柱痕や土管暗渠、石組大溝、石組小溝、敷石塀壁、砂利敷などが確認されています。砂利敷を広範囲にわたって地面に敷き、場所によっては畑や畑で区画されていたこともわかりました。調査地周辺では、いまだ住居跡や建物跡が確認されておらず、石蔵を施した空閑が広がっていたと考えられています。

2.検出遺構

今回の調査では、石敷、砂利敷、土壇を検出しました。

石敷は、拡大の石を敷き詰めたもので、樫坂が曲線と直線をなす平面形は不整形です。石敷の南辺は直線をなして途切れます。この石敷のほぼ中央には径約2mにわたって石が敷き取られています。この敷き取りの中央には規格が約1.5m、深さ40cmの穴が掘られていた。

この石敷の周囲全体には小石や砂利を敷き詰めた砂利敷が施されています。調査区の西側は残りがよく、密に敷き詰められていることがわかります。これら石敷と砂利敷は、その下の建地層から出土した土器や瓦から、時期は7世紀中頃に当たります。その後は、土地の開墾や開発によって、部分的に石が敷き取られ、石敷が現れている部分もありますが、大きな変化を受けずとなく遺跡が埋まっていくことがわかりました。

このほか、調査区の東側、「入鹿の首塚」の近くでは円形とみられる径約3mの大きい土壇を検出しました。掘削された年代が特定できませんでしたが、砂利敷と同様にそれ以降に掘られたもので、最終的に平安時代以降に埋まったとみられます。

3.まとめ

今回の調査は、飛鳥寺西方の門前にあたり、広範囲に石敷や砂利敷を施していることが明らかとなりました。これら石敷は拡大の石や小石、砂利などの大きさの異なる石を場所によって敷き分けられているのが特徴です。今回の調査では、飛鳥時代の石敷が良好な姿で残っていましたが、樫樹の痕跡は確認できず、まことに「樫樹の広場」である確証は得られませんでした。しかし、樫樹の広場に相当する石敷を確認できたことは、樫樹の広場を解明するうえで重要な成果となるでしょう。